誘い、そして終わりの始まり

Kei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誘い、そして終わりの始まり

【Ｎコード】
Ｎ７４５３Ｍ

【作者名】
Ｋｅｉ

【あらすじ】
私は姉を失いました。この手で…蝶にしました。その日から暫くして…夢を見るようになったんです。雪の降る、お屋敷の夢を…。そこで、お姉ちゃんに会いました。ずっとずっと先を歩いて行ってしまうんです。お姉ちゃん、お姉ちゃん……

焼き付いたように残る掌の痕

宙に舞う、紅い蝶

ひらりひらり舞うその姿

まるでどこかへ誘うかのように

その姿を見て、少女は呟いた…

「…お姉ちゃん…」

気付いたら、少女は…

見知らぬ、雪の降る古びた屋敷に立っていた…

【誘い、そして終わりの始まり】

久々に戻ってきた実家で、姉さんとその子供達、俺とそして母さんと…何をするわけでもなく、何気ない会話をして楽しんでいた。

東京の暮らしはどうだとか、学校は楽しいかとか、友達とはどんなところに遊びに行くのかとか。

母さんは田舎から出た事がないから、都会の事に興味があるらしい。いろいろと双子に聞いていた。そんな微笑ましい姿を遠くで見ていた俺だったが…その数時間後、姉さんが血相を変えて俺の所にきたのだ。

姪の双子…繭と澪が失踪したと。

繭と澪がいなくなったのだと…。

姉さんも俺も、同じ事を前に経験している。同じように実家に遊びに来た時に、繭と澪が森の奥に入ったらしく、繭が崖から落ちて怪我をしたのだ。その時、必死に探したのを今でも鮮明に覚えている。

見つけた時の安堵、そして…いつも寄り添っている双子の片割れしかいないという、不自然な現実。

泣き崩れている澪に聞くと、震える指で下を指した。

そこには…ぐったりとした繭の姿があった。

あの時のことが鮮明に甦る。あの森には、変な噂もあった。入った人間が神隠しにあうという不可思議な話だ。俺も子供の頃から、あの森の奥深くには入ってはいけないと散々言われたものだ。

――――双子地蔵を見つけたら、すぐに引き返すんだよ…

それが母さんの口癖にもなっていたが…もう随分と昔の話で、今となってはすっかり忘れていたはずなのに。

何故、今思い出した？

妙な胸騒ぎがする。

急がなければ…取り返しの付かない事になるような…そんな予感がする。

泣き崩れる姉さんと、心配そうに部屋をうろうろする母さんに大丈夫だからと言い聞かせ、俺は一人森へと入った。

薄暗く、そして冷たい空気が漂うそこは…今思えば、確かに…普通ではないかもしれない。幽霊とか…そういう曖昧な存在は全くもって信じる気になれない俺でも、何か居るのではないかと…そう錯覚してしまうほど、異質な空間だ。

子供の頃に何度か遊びで入った事があったが…こんなにも不気味な場所だっただろうか？

本当に、こんな所に繭と澪がいるのだろうか？

もし居なかったら…？

そんな不安を拭うように、必死に森の奥へと進む。

――――リン…

何か…鈴のような音が聞こえたような気がした。

「何だ…？」

辺りを見回すが、もちろんそんなものがあるはずがない。試しに足元も懐中電灯で照らしてみる。何かを蹴ったのかもしれないと思ったが…どうやらそうでもないらしい。

「空耳か…？」

こんな異様な場所で、とうとう神経まで麻痺してきたか？と思った時。

――――リン…

またあの音が聞こえた。

空耳じゃ…ない？

確かに、何かが鳴っている。鈴のような…しかし、鈴よりももっと

澄んだ音だ…。

音がしたと思われる方に視線をやると、やたら明るい何かが見えた。

紅く…紅く…まるで血のように紅い…

「…蝶…？」

昆虫には詳しくないが、俺が生きてきた中で紅い蝶など…お目に掛かった事はない。いよいよやばくなってきたと…本気で思った。こういう時の直感は、どんなに霊感が無い人間でも大抵が当たるものだと言ったのは、霊感が強い…行方不明となった真冬だったか…？しかし、だからと言って引き返すわけにもいかない。

―――リン…

またあの音が鳴った。それに呼応するかのように、紅い蝶もヒラヒラと舞う。

「……誘って…いるのか…？」

こういう時、誘う理由は２つ有るらしい。

１つは怨霊が生きた人間を殺そうとする時。

そしてもう１つは…

迷い人を導こうとしている時。

大抵の場合は前者が多いと言ったもの真冬だった。

今果たして…この蝶は俺をどうしようとしているのだろうか？

———リン…

またあの音が鳴った。と同時に、蝶がゆっくりと森の奥へ消えていく。

何故かは分からない。けれど…俺は、アレを追わなくてはならないような気がした。

まるで俺の歩調に合わせるかのようにヒラヒラと舞う紅い蝶。

暫く追うと、その紅い蝶はふわりと消えた。霧散したのだ…。

ありえない。

一体何が起きたんだ…？

目の前で起きた光景に呆然としていた時、ふとある事が脳裏を過ぎった。

あの紅い蝶は…何故俺をここに誘った…？

ハッとなり辺りを見回す。

まさか…、まさか…？

「澪ッ、繭！！居るのか！？居たら返事をしろ！！」

そうとしか考えられない。もしあれが真冬の言う、迷い人を導こうとしているものだとしたら…ここにきっと、探している姪達が居るはずだ。

「頼む、頼む…！！」

祈るような思いで、必死に草を掻き分けて。しかし、どんなに探しても見つからない。

やはり…ただ迷い込ませるだけの存在だったのか…？

と、その時。

———リン…

またあの音が聞こえた。

音のした方に視線をやる。妙に明るく光っている場所が遠くに見えた。

足早に近寄ると…

「澪ッ！？」

そこには…双子の妹、澪がぐったりと横たわっていた。光の元はどうやら懐中電灯だったらしい。

「澪、澪！！しっかりしろ！！」

必死になって声を掛けると、僅かに身体が動いた。そして…

「……っ…」

うっすらと目を開ける。

「澪…俺だ、分かるか？」

ぼんやりとした視線は暫く焦点が定まらなかったが…

「…螢…兄さん…？」

俺の姿を確認すると、起き上がり俺にしがみ付いてきた。よほど恐い思いをしたのだろう。その体は震え、そしてずっと泣き続けている。

よかった…という安堵と共に、過去の映像が脳裏を過ぎった。

澪が一人で泣いている姿。

その傍に…繭がいない。

あの日と…同じじゃないか…？

「澪、繭は…？繭はどうした、一緒じゃないのか？」

泣きじゃくる澪に、繭の事を尋ねると途端に体を固くする。泣いていた声がピタリと止んだ。

「……澪…？」

どうしたんだと、声を掛けようとした時…

「私が…、私が…！！」

震える声で、何かを伝えようとしているのだが。

「あの場所で…、儀式…、紗重が…、八重が…！！」

言葉があまりにも断片すぎて分からない。繭の身に何かが起きたのだろうか？そうだとしたら、この近くにきっと繭が居るはずだ。

探さなくては…

「澪、大丈夫だ。繭もきっと見つかる、だから…」

少しでも安心させようと…声を掛けた。

スッと澪が俺を見上げる。その虚ろな瞳に、思わず俺の体は凍りついた。

何か…只ならぬものを感じた。

一体…澪に何が起きているんだ…？

暫くの沈黙…

そして、澪が口を開いた。

「お姉ちゃんは……一つになった…。私と、一つ…。蝶になった。紅い…紅い…。儀式をしたの。双子の宿命…。私が、お姉ちゃんの……首を……」

そこで、澪は気を失い俺の腕の中に倒れ込んだ。

「澪！？」

驚き、声を掛けるが…目を覚ます様子は無い。

しかし、言葉の意味は…一体、何なのだろうか？

一つになった

蝶

紅い

儀式

双子の宿命

首を…

繋がらない言葉。しかし、最後…澪は何を言おうとしていたのだろうか？

まさか…？

いや、この双子は本当に仲の良い姉妹だった。そんなこと…あるはずがない。きっと、どこかに繭もいるはずだ。

澪を背負い、更に辺りを探す。繭がどこかに居ると信じて。

しかし、どんなに探しても繭は見つからず…

焦燥ばかりがつのる。

その時、目に飛び込んできた丸い…小さな石。

いや、道祖神の仏像か？

———双子地蔵を見つけたら、すぐに引き返すんだよ…

母さんの言葉が、突然脳裏を過ぎる。ハッとなってその道祖神らしき仏像に懐中電灯の光を当てた。

「双子地蔵…なのか…？」

並んだ双子、紐でつながれた２人。

これだけだったらどこにでもある仏像だ。

しかし。

「何だ、これ…」

片方の人間の首から上が…無い。

危険だと…俺の本能が警鐘を鳴らしている。母さんの言った言葉が何度も何度も繰り返し聞こえる。

早く、この場所から離れなくては…！！

しかし繭は…？まだ繭は見つかっていない。

このまま帰るわけには…

―――リン…

するとまた、あの音が聞こえた。振り向くとそこには、さっきの紅い蝶。また…誘うように、ヒラヒラと舞い始めた。

繭の元へ導こうとしているのかもしれない…。

そう思い、必死になってその蝶の後を追った。

ただ、繭の姿を見つけるために…。

しかし途中で、フッとその蝶は姿を消す。気付いたらそこは…

「そんなっ…！！」

森の入り口だった…。

「まだ、俺は…繭、を…ッ…！？」

何故かは分からない。もしかしたら…身体が限界だったのかもしれない。極度の疲労、そして子供とは言え人一人背負った状態で長い時間、足元の悪い道を必死に歩いていたんだ…無理もない。

突然、俺の体から力が抜けて…視界が暗転した。

完全に落ちる直前に、紅い蝶が見えた。それに重なって見えた…繭の姿。

悲しげに俺を見て笑う。

そして…

———螢兄さん、澪をお願い…

そう…聞こえたような気がした。

目が覚めるとそこは白い部屋。病院だとわかるまでに時間は掛からなかった。話を聞いて心配した優雨が態々駆けつけてくれたらしく、無事で安心したと笑っていた。

無事に戻って来れたのかと安堵したものの…俺はすぐに思い出す。

澪は見つかった。

しかし…

片割れが見つかっていない。

「優雨！！繭は！？…澪の双子の姉、繭は見つかったか！？」

もしかしたら俺が眠っている間に見つかったかもしれないと…淡い期待を抱いたが、答えは…

「いや…まだ見つかっていないみたいだよ。警察と地元の人達が、螢達の倒れていた近辺を探しているんだけれど…森が深くて捜索が難航してるみたいだ。」

もっとも聞きたくないものだった。

姉さんの大切な娘。

澪の大切な姉…。

きっと姉さんは悲しんでいるに違いない。
きっと澪は泣いているに違いない。
「姉さんと澪はどうしている？」
「静さんは…待合室で泣いていたよ。声を掛ける事が出来なかった…。澪さんはついさっき目が覚めたばかりだ。警察の人が色々聞いていたけれど…何も話そうとしないみたいで…」
澪は…何かを知っているはずだ。あの時…森で再会した時、必死に何かを訴えようとしていた。
一体…澪は何を知っているんだ…？
「それからね、螢…」
「ん…？」
「澪さんのことなんだけど…」
どこか言いにくそうに優雨が言葉を濁す。先を促すように視線を向けると、難しい表情でこう言った。
「澪さんの首元に…何かの痕が付いているらしい。」
「痕？どんなだ？」
「それが……」
———まるで、誰かに首を絞められたかのような…

優雨の言葉に血の気が引いた。

そしてその言葉を聞くや否や、俺は澪の病室へと向った。少し足元がふらついたが、優雨が苦笑しながら支えてくれる。

そして…俺と優雨の2人で澪の病室へと向った。

「澪…起きてるか？」

カーテン越しに声を掛ける。

「……」

しかし返事はない。

「…寝ているのかもしれないね…」

「あぁ…」

数日間、行方不明だった事を考えると…相当体も疲労しているだろう。今はそっとしておくべきか…そう思った時だった。

「ずっと…ずっと、一緒だよね…。約束だもの…。私達、一つになったんだよね…。……お姉ちゃん…、お姉ちゃん…」

まるでうわ言のような澪の呟き。

優雨と2人で顔を見合わせる。

繭がそこにいるのか？しかし…そんな雰囲気ではない。

「澪？」

そっとカーテンを開ける。

やはり…そこには澪の姿しかなかった。

「……螢兄さん…？」

俺を映したその瞳はどこか虚ろだったが…弱々しく、ふわりと笑った。

「大丈夫か？」

「……うん…」

静かに頷く澪の首元には…

優雨から聞いた通り、赤い…何かの痕。

それはまるで…

あの時に見た紅い蝶のようだった。

「…澪…」

「螢兄さん」

俺が聞こうとするより先に、澪が俺をしっかりとした声で呼んだ。

聞きたい事は色々あったが、その言葉を飲み込む。

澪は…何かを話そうとしている。

一体、何を…？

「もう…居ないの。お姉ちゃんは…もう居ない…。蝶になった。紅い、紅い蝶に…。お姉ちゃんはそれを…望んでいたのかもしれない。だから、私が蝶にしてあげた…。私が…？違う、私じゃない…。紗重が…望んでいて、八重も…儀式を…。」

しかし、最初こそしっかりした口調だったものの…後になるにつれて、段々と言葉の意味が繋がらなくなってきた。

最初に澪を見つけた時と同じだ。

紗重、そして八重…。あの時もこの名前を口にしていた。行方不明になっていた間に、その人物と会ったのだろうか？

それに…繭が蝶になりたがっていたというのは…どういう意味だ？

「紅い…蝶…」

「どうしたんだ、螢？」

「いや…」

そういえば…

澪の元まで導いてくれたのは紅い蝶だった。

澪を見つけた後、森の出口まで俺達を導いたのも紅い蝶。

そして…

完全に意識を失う直前に…紅い蝶に重なるようにして、繭の姿が見えた。

もしかしたら…あれは繭だったのか？

だとしたら、繭は……

「澪…、今日はゆっくり休むんだ。また落ち着いた時に話を聞かせてくれ。」

認めたくはなかった。

「…ありがとう…」

中々子供を身ごもる事が出来なかった姉さんが授かった双子の女の子。

一度、失いかけた恐怖。

しかし、今回は…

やがて規則正しい寝息が聞こえてきた。俺達はそっと部屋を後にする。

入れ替わるように姉さんが澪の傍に寄り添っていた。
待合室のソファーに座り、俺は一人いろいろ考える。
澪の事、繭の事、あの森の事

そして…

不気味な双子地蔵と、紅い蝶…。

「やはり、あの森には何かあるのか…？」

噂では地図から消えた村があるとも言われていたが…都市伝説と化していて、信憑性はまるで無い。

しかし、現に…

あの森で繭は失踪してしまった。

母さんの話は殆ど覚えていないが…双子地蔵があって…その先に鳥居があるのだと話していたのを何となく覚えている。

その鳥居をくぐったら、戻れなくなるのだそうだ。

もしかしたら…その鳥居の向こう側に繭がいるのか？

しかし…澪は“もう居ない”と言っていた。だが“ずっと一緒”だ

とも言っていた。

「何がどうなっているんだ……」

ノンフィクション作家として、民俗学についてもそれなりの知識を付けてきたと自負していたが…こういう時には何の役にも立たないとは。

「螢、あまり自分を責めるな」

「…優雨…」

優雨の言葉に顔を上げると、彼は微笑みながら缶コーヒーを差し出した。

「サンキュ」

「いいよ、今度夕食を奢ってもらうから」

悪戯っぽく笑う優雨に…何となく救われたような気がした。

ついこの前は真冬が行方不明となった。

そして今度は繭が…。

澪もきっと、これから先…辛い思いをするだろう。

だったら、俺は…俺に出来る事をしたい。

「優雨、俺は…」

「あの森について調べる？」

「……よく分かったな」

「何年一緒にいると思っている？君の考えてる事ぐらいわかるよ」
もちろん、僕も手伝うから…。優雨は笑いながら言ってくれた。
「ありがとう」
「見つかるといいね…繭さん…」
そうだな、とは…言えなかった。
あの時、幻だったかもしれないが…その時に見た繭は…
俺に澪を頼むと言っていた。
澪に頼りきりだった繭が…澪から離れた。
それはつまり…
もう、繭は…
だからこそ、何が起きたのかを調べる必要がある。澪のためにも、姉さんのためにも…。
「じゃあ、出来る限り資料を集めておくよ。螢はもう少し休んだ方がいい。」
「いや、俺は平気だぞ？」
「まだ検査があるって先生が言っていた。退院はそれからだよ」
「なんだ、俺もしっかり入院扱いになってるのか？」
「当然だ。森の中で倒れていたんだから…」

まぁ、いろいろありすぎて…少し休みたいと思ったのも事実だ。

「仕事は暫く休みだな…」

「その間の、螢の分の仕事はしっかりと残しておくから！！」

「そこは片しててくれよ…」

暫くして優雨は病院を後にした。仕事と…それから、婚約者の黒澤怜さんと会う約束をしていたらしい。なんだか悪いことをしたとバツが悪くなったが、彼はそんな事を気にした風も無く「お大事に」と言い残して帰って行った。

一人残された俺は、自分の病室で考える。

俺に…何ができるのだろうか…？

暫くすると、外から何か音が聞こえてきた。

「雨か…」

どうやら雨が降り出したらしく、激しく窓に打ち付けている。

この雨が更に俺の気分を沈めてしまいそうだ。

「……疲れた……」

最近は仕事詰めで、久々の帰省だった。

久し振りに会った姪達と、楽しい時間を過ごした。

病弱な姉さんが嬉しそうに笑っているのを見て少し安心した。
母さんが張り切って料理を作ってるのを見て、相変わらずだと笑った。

つい数日前のことなのに…随分と過去に見た夢のようにさえ思えてしまう。

あぁ…そういえば、眠りの家についての都市伝説も調べている最中だった。
それと今回の件を同時進行で調べていくとなると…また忙しくなるな。

そっと、目を閉じる。
少し眠ろう…
そう思った時。
———リン…
あの音が鳴った。

俺の意識は覚醒する。音のした方に慌てて視線を向ければ…

「紅い…蝶…」

あの時と同じ、紅い蝶が舞っている。

そして…

――――お願い、お願い…！！澪を助けて…！！

“聲”が聞こえた。

繭の“聲”が…。

俺は慌てて澪の病室へと向う。

何かあったのか？

しかし、澪はただ規則正しい寝息を立てて眠っているだけだった。

「……やばいな、疲れがピークか…？」

幻覚と幻聴…。

本格的に身体が限界を訴えている。

ここは大人しく休んだほうが良さそうだ。

そっと澪の頭を撫でて、俺はまた自分の病室へと戻った。

それから数日後の事だった。

澪が不思議な夢に誘われるようになったのは。

そして…

ある日、気付くと俺は…

「ここ、は…まさか…！？」

雪の降る、古びた屋敷に…立っていた。

あの時、病室に現れた紅い蝶は…繭は…

この事を俺に知らせようとしていたのかもしれない…。

しかし、すべては動き始めてしまった。

あと戻りはもうできない。

ここは眠りの家…。

死者と会えると噂されている…都市伝説の場所だ。

きっと、澪は繭の姿を追いかけているのだろう。

だったら…

今度こそ、俺が助けなくては。

もう…

誰かが目の前で消えるなんて現実は…

見たくない…

【Ｅｎｄ】

（後書き）

私のメル友であり、なりメ友であるお方のＦＦマガ４周年記念で送らせて頂いた代物です＾＾ＦＦマガなのに何で零？って思いますよね…私も思います…！！（↑）ただ、どのジャンルでもいいとのことだったので、その時このお方がハマり始めていた零の小説を送りました！！久々の小説で気に入っていただけるかドキドキだったんですが…どうやら気に行って頂けたようです＾＾よっしゃ☆そのお方のお名前を出したいのですが、ちょっと暫く待ってほしいとの事だったので機会があればご紹介したいと思います♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7453m/

誘い、そして終わりの始まり

2010年10月8日22時23分発行